

デイルタイの心理學的理念の基本 的なるものについて (四)

檜 崎 淺 太 郎

+

私は本誌の本年の七月號迄に於て、デイルタイの心理學的理念の基本的なるものを略ぼ記述し終たから、最後に氏の心理學の基本方法の一たる、否氏が精神科學のあらゆる廣義の研究に對する基礎的取扱としての地位を與へたる體認作用 (Verstehen, in dem nun anzugehenden weiten Umfang genommen, ist das grundlegende Verfahren für alle weiteren Operationen der Geisteswissenschaften,.....) (〔二十六三三三頁〕) を、稍詳細に記載し、終に精神の發達に關する理念を略述して、一先づ拙稿を終りたいと思ふ。

前にも述べたる如く、デイルタイの心理學は精神生活の全實在を、最高の確實度を以て、分析し、之を記述せんとするのであるが、之に到達するには、精神生活を先づ認識しなくてはならない。精神生活の認識は、精神生活の特色に基づき、特殊の認識方法

たる内的知覺による。デイルタイは之を自省と名づけた。所が自己の精神生活就中自己の個性は唯自己を自省したのみでは認識できない。他人の精神生活の特徴と比較することによつてのみ初めて自己の個性が認識せられる。然るに他人又は團體の精神生活の認識は、自省によつては全然不可能である。他人の内的なるものは、吾人に直接には與へられない。他人より直接に與へらるゝものは、廣義の精神的表徴である。されば他人の精神生活の認識は、自省にあらざる他の特殊の方法を要する。

デイルタイによれば、個性は人間の一様性の基礎の上に發展したる獨自性であるが〔七二七三頁〕この各獨自性を有する個々の人間を科學的に認識すべき手段がデイルタイの所謂體認法である。〔二七七三—三七頁〕。個々の人間が果して科學的に認識出来るであらうか。若し出來るとすれば、如何なる手段によるべきであらうか。この問題は心理學の方法論上重要なのみならず、文化生活より見るも、極めて重要な意義を有して居る。何となれば人間の行動は常に他人の體認 (das Verstehen anderer Personen) を前提として居るからである。人間の幸福の大部分は、他人の精神狀態を追感することに始まり、全哲學的歴史的科學は、個々の人間を後より正確に理解し得る

であらうとの假定の上に基礎づけられて居る。さかくの如くに、デイルタイは考へて、系統的精神科學の基礎として、體認の過程を研究した。

デイルタイの體認作用は、生命に關する普遍妥當なる智識を探究することを以てその目的とせる一種の認識作用である。されば氏は *Verstehen fällt unter den Allgemeinbegriff des Erkennens.* と云つて居る〔二十六〕三三三頁而して氏のこの體認作用とは、精神生活の表現として外部から感覺的に與へられたる表徴を手段として、その内的なる精神生活を認識する作用である。之を以て氏は氏の著作の三ヶ所にこの意義を次ぎの如くに明記して居る。

Wir nennen den Vorgang, in welchem wir aus Zeichen, die von aussen sinnlich gegeben sind, ein Inneres erkennen: Verstehen. (〔二十六〕三三八頁)

Sonach nennen wir Verstehen den Vorgang, in welchem wir aus sinnlich gegebenen Zeichen ein Psychisches, dessen Äusserung sie sind, erkennen. (〔二十六〕三三八頁)

(Satz 1) Verstehen nennen wir den Vorgang; in welchem aus sinnlich gegebenen Äusserungen seelischen Lebens dieses Zur Erkenntnis kommt. (〔二十六〕三三三頁)

體認作用とはかくの如き認識過程を云ふのであるが、この作用に依つて知ることを

の出來る範圍は、精神生活の全面に擴がり（二二八）三〇五頁）この作用の行はるゝ外的表徴の範圍は、兒童の發する喃語（Lallen）から Hamlet 又は Vernunftkritik に至るまで、苟も精神生活の表現と認め得らるゝ一切の表徴に及ぶのである。されば人の言葉、表情、動作、文章等より諸種の社會的規定、音樂、彫刻、繪畫、建築等に至るまで、皆體認作用の手段となり得るのである。そしてこの表徴はそれ自身は主として物理的のものであるが、しかしそれは單純に物理的性質のみにあらずして、更に加へて精神的要素が結合するか、伴隨するか、内在するか、若しくは精神的要素を暗示して居る。而してドイツ人は體認作用を上記の範圍に限つて居るのであるから、自然の認識をば、體認作用に加へない。又自己の内的状態の把握も體認とは呼ばない。（二二七）三一八―三一九頁）。

かくの如き範圍の體認作用中に於て、生命の表現の永續的に固定せられたるものゝ技術上の體認を特に解釋（Auslegung oder Interpretation）と氏は呼んで居る（二二七）三一九頁、二二六）三三二頁）。生命の表現の客觀的に固定せられたる顯著なるものは、繪畫及び彫刻であるから、この繪畫及び彫刻の解釋の術は、既に Wolf, F. A. によつて要求せられ、Wolker はこの術の研究に着手し Dreier がこの研究を爲し遂げんと試みたが、この遂行中に於て、繪畫、彫刻の如き默せる作品の解釋には、常に文献よりの説明を以て、

之を補足すべきことを必要とするを感ずるに至り、解釋術の中心は、文献の解釋に存することが明らかとなつた。精神生活及び歴史の理解に對して、文献の意義の重要なことは、多くの精神的表現中に於て、言語ほど人間の内的なるものを、比較的完全に、充分に且つ客觀的に、理解出來る様なものが他に存しないからである。夫故に解釋術の中心點は、文章の内に含蓄せられたる人間精神の解釋にある。デイルタイは、文章に固定せられた精神の表現の體認の術の學を Hermeneutik と呼んで居る。〔二十六〕三三頁〕

かくの如くに體認は精神生活の外的表徴を主段として、精神生活そのものを認識せんとする作用であるが、これだけの意義に關してはデイルタイと他の學者との間に著しい相違は無い。例へば Th. Eisehans は „Unter Dertung verstehen wir den Vorgang, in welchem wir aus sinnlich gegebenen Zeichen ein Geistiges erkennen und wiedergeben. 〽 (K) 〽 Benno Erdmann は „Für das Verstehen..... ist die Grundlage das sinnlich wahrnehmende Erkennen jener Ausdrucksbewegungen oder ihrer Produkte, in denen sich das fremde Geistesleben ausdrückt oder symbolisiert.“ 〽云つて居る。〽二九九〽三五七頁。デイルタイの功績はこの體認作用を精神科學特有の方法にまで高め、且つこの作用をある程度まで詳細に分析した點にある。

かくの如くに體認作用の對象は、主として他人の精神生活をその客觀的表現から認識せんとするのであつて、この作用の主として關係する所は、シュプランガーの云ふが如くに〔二十九三五七頁〕形態的なるものの精神的意義 (seeleische Deutung eines Körperlichen) を探究するにある。我々は他人の主觀的體驗に、直接に接觸することは絶對に出来ない。我々の直接に接觸し得るは自己の體驗のみであるから、我々は他人の主觀的體驗を認識せんとするには、他人の體驗の客觀化せられたもの (Objektivationen) を私用するの外は無い。體認作用は、この必然的なる條件に基づいて起つたものである。この體驗の客觀化せられたものは、常に物的と精神的との兩面を有して居り、體認作用はこの兩面を有する客觀的なるものを媒介者として、直接に接觸することのできない、精神生活を把握せんとするのである。

他人の理解を初め歴史、文學、繪畫、彫刻、一切の文献の理解は、この體認作用に基づき、又自己の個性の認識も、他人の個性との比較によつて初めて達せらるゝのであるから、ある意味に於て自己の本質の把握も亦體認作用を豫件とする。かくの如くに體認作用は廣義の自他の精神生活の把握の基礎となるものであるから、精神生活の認識に就いては、之を缺ぐことが出来ない。さればデイルタイは *Das Seelenleben kann*

durch verschiedene Methoden aufgeklärt und analysiert werden. In jeder derselben greifen Erleben und Verstehen ineinander. 〆論じて精神生活の研究に對して、Erleben 〆 Verstehen の基本作用なることを指摘して居る。(二十八)三〇五頁。そしてこれより先一八九四年に氏が Die Natur erklären wir, das Seelenleben verstehen wir. 〆斷定せしは誰しも熟知の事柄である。

デイルタイの云ふ體認作用は、幼兒の喃語より詩人又は哲學者の作品に至るまでの精神的産物の意義の理解を意味するのであるから、従つて體認作用には色々の性質と程度とがあり、この程度は直接には體認主觀の興味の性質又は程度に基づくものと氏は爲して居る。そしてその興味の制限せらるゝ場合には、體認は理解 (das Verstehens) となる。例へば我々が説話者の内的生活に興味を持たない場合には、その説話に傾聽することなく、唯その説話の實際的に重要な點のみを捕へる。然るに説話者の内的生活に興味を感ずる時は、各瞬間の表情及び言語に一々深く留意し、之等のものを通じて、その内的生活に透徹せんとし (二十七)三一九頁) 或は更にかゝる内的生活の成因にまでも進まんとする。

精神の客觀的表現又は精神の平行現象と認むべき客觀的なるものには種々の種類があり、この種々の客觀的なるものと精神との關係には種々の種類と程度とがあ

るが、この客觀的なるものゝ種類に應じて體認を類別することが出来る。かの普通の表情又は身振の如き無意的身體運動は、ある精神状態と規則的従つてある程度に於て必然的に結合するから、この無意的身體運動を手段としてある精神状態を類推的に推察することが出来る。かゝる體認は身體的體認 (*das physische V.*) と名づけることができる。身體的體認はある精神状態を漠然と推定し得るに止り、精神の内面に深く細かく進入することはできない。従つてかの骨相學及び面相學はガル及びラベーター以來顯著の進歩をなすを得ないで行き詰りの状態にある。

次に精神の表現の顯著なる客觀的なるものは言語である。言語は原始的の感動詞を省くの外は、皆精神生活の事實を傳達せんがために特に意志作用に依りて産出せられたる物理的表徴であつて、身體又は表情の如くに無意的表徴では無い。かの如き言語よりの體認を、言語的體認又は叙述の體認 (*das sprachliche V. oder das V. von Aussagen.*) とシェプランガーは名づけて居る。(三十二)三七頁。がこの言語的體認に依つて、この言語の指示せる體験的内容を略ぼ推定することができる。しかしこの言語的體認は、被體認者の生命主觀にまで及ばない。之に達せんとするには言語的體認の背後に進み、一方に於ては人格的體認 (*das persönliche V.*) に、他方に於ては歴史

的又は事實的體認 (das geschichtliche oder sachliche V.) に移らなくてはならない。更に過去の個人又は團體の精神生活の推定は之を廣く歴史的體認 (das historische V.) と呼ばれて居るが、之等の人格的事實的、歴史的體認に至ると、精神の客觀的なるもの、外に、更にある純粹精神的なるものを必然的の手段として居る。

他人又は團體の精神生治がある身體的、物理的なるものを通して體認し得らるゝは、そもゝ何に基づくのであらうか。何人も他人の憂に沈める表情を見て、何等かの悲哀を内深く藏するものと推定して決して誤らない。こは一には心身の現象間の一定度の不離の關係に基づき、二にはこの關係の人類に共通なるに基づき、三には精神組織に一定の規則性の存在するに依るのであらう。換言せば他人の精神生活が、その表現を通して體認し得らるゝのは、その一般的條件たる人間性の一様性に基づくのである。この人間性の一様性を明瞭に指摘したのは、シュライエルマツヘルである。氏はあらゆる個人的差異は、その究極に於ては、性質的相違にあらずして、それは精神過程の程度の差であるとしたのであるが、デイルタイはシュライエルマツヘルのこの見解に立脚し、解釋者の個性と著作者の個性とは、比較すべからざる二つの異なる事實にあらず (二二七、三二九—三三〇頁)、あらゆる個性は皆同一の作用と内容とを有

し (Dieselben Funktionen und Bestandteile sind in allen Individuenfäden.) (二十六)三三四頁、加ふるに各人は同一の外的世界に生活して居るから、各人の觀念界には同一の觀念像が形成せられて居る。之を以て體認者が著作者の精神生活を後から構成することが出来るとした。而してこの構成は體認者が自己の生命を歴史的環境内に移し、次ぎに自己の精神過程を高潮し、強勢し、他の精神過程を退歩せしめ、以て他人の生活を自己の裡に構成するにある。自己を他に移すことによつて、他を構成するのである(二十七)三三〇頁)とした。

かくの如くにデイルタイによれば、體認は自己を他に移すことによつて、他を構成するのであるから、結局體認も氏の認識論の第一原理たる生命より出發するのである。しかし生命の如何なる所より出發すべきか。他人の内的體驗的なるものには、如何にしても吾人は浸入すべき手段を持たない。こは永久に閉ざされたる獨自の世界である。唯吾人の把捉し得るものは精神生活の意味である。體認は他人の精神生活の意義を、自己の精神生活及び歴史生活の經驗より構成せんとするのであるが、デイルタイはこの點を次ぎの如くに述べて居る。

心理學及び哲學の出發點は、生命であり、而してこの生命は精神の生ける組織體に

して、この組織體の統一の中心をなすものは生命の意味 (die Bedeutung des Lebens) である。この生命の意味によつて、詩も、宗教も、哲學も内的の關係を保つて居る。この生命の意味は、生命その者から汲み取りたる規範であつて、その本質は個々の生命の部分及び價値の關聯の統一である。而してこの統一は生命の本性に基づくものである。體驗の過程中に於て、この統一の動性を、生命の意味から、感受するが如くに、體認過程中に、生命の統一の動性を感受する。換言せば體認作用は生命の意味から出發するのである。(Verstehen nur aus Bedeutung.) (二二二)八四頁。デイルタイはこの Bedeutung を以て、生命を解釋する對象的規範 (gegenständliche Kategorie) を爲し、之を時に Bedeutung と云ひ、時に Bedeutsamkeit と呼び、或は又 Idealität とも名づけて居る。(三三)三〇九頁。自省も生命それ自身から出發し、體認も生命それ自身から出發するのであるから、前に既に指摘した様に、この生ける生命組織の記述が認識論の基礎を成すのである。而して體認に於てはこの生命の部分より出發するにあらずして、全體より (vom Ganzen aus) 出發し、作用又は内容の關聯より出發するにあらずして、意味又は理想より出發するのである。この意味又は理想は精神生活に於て、常に生動せるものであり、常に知られ居るものである(二六)三三四頁。デイルタイは體認の内面的出發點をこの生動せ

る知られたるものに求めた。而してデイルタイ以後の學者はこの生動せる知られたるものゝ性質及びその性質の本質の探求に一步を進めて居る(二九)。

體認作用の過程の本質を形式的に表現すれば、體認は先づ最初に精神的表現の個々の特別のものを資料として、之に推測又は洞察を加へて魂又は全體の理念を把握するにあるが、この推測又は洞察の結果たる魂又は全體の理念は、可能的のものであつて、體認を進行せしむる上の一種の假定である。如何なる體認作用と雖も、かゝる假定の上にもみ發足し進行して居る。さればデイルタイはこの點に關して次ぎの如くに述べて居る。„Mit der ersten Besonderheit erfasst man ahnend den Geist und die Idee des Ganzen.“ „Davon ist Wahrheit nur dies, dass alle Auslegung mit einer doch sehr veränderlichen Hypothese als dem Inbegriff der Möglichkeiten beginnt, die sich im Verlauf der Auslegung verengert.“ (二二一—八二頁)。

而してこの一種の假定の上に立脚して、個々の表現を精神的に解釋し、この解釋によつて得たる精神的なるものを、この假定に基づいて聯結し、かくして一切の表現が一定の精神的意義の下に統一し得たならば、茲にその表現が初めて體認せられたものである。若し又一切の表現がこの假定の下に精神的に統一せられないならば、更

にこの假定を訂正し、新なる假定の下に前と同一形式の過程を反復し、眞の妥當的假定に達して、體認を終るのである。然らばこの妥當的假定の本質は何であらうか。デイルタイは之を作品の起因につきて具體的に記述して居る。

個々の作品の内的形式の背後にあつて、この形式の起因となつて居るものは内的生動性 (die innere Lebendigkeit) である。この生動性は創作の相違する毎に異り、藝術家、哲學者、實際家、宗教家の内的生動性はそれ／＼異つた特性を有して居る (二十六三三五頁)。この生動性の本質は理念 (Idee) であるが、この理念は、抽象的思惟の産物では無くして、無意識的なる精神關聯の内に存し、作品の構成中に終始活躍して居るものである。創作者はこの理念を使用せず、又全然意識してゐないかも知れない。しかし作品の内的形式は、この無意識的精神關聯からのみ體認すべきである。先に述べたる一定の假定とはこの無意識的精神關聯の豫想である。體認者は之を無意識の淵から、意識の水面に高めなくてはならない。體認の最後の最高目標は茲にある。之に達するには、體認上の諸種の規定の外に、特殊の天稟を有する體認者の創造的方法を必要とする (二十六三三五頁)。かくの如くに體認の究極の目標は、被體認者自身が自己を理解せるよりも、更により深く被體認者を體認せんとするのであるから、體認作用

は被體認者の意識を越へて、無意識的創造の過程（二十七）三三頁にまで進入し、そこに於て活躍せる理念を捕へなくてはならないのであるが、之を如何にして把握するか。この點につきてデイルタイの論述せる所は僅少である。

一切の認識問題は經驗から普遍妥當的知識 (allgemeingültiges Wissen aus Erfahrungen) を探求せんとするのであるが、精神科學に於ける經驗に一定の特性があるから、この特性に基づいて、精神科學の認識の特性が定まる（二十六）三三四頁。しかし體認も亦認識の一種 (Erkenntnisart) であつて、自然科學の認識法と同様に要素的なる論理作用たる歸納法、分析法、構成法、比較法等を利用するが、この利用は精神科學の經驗の特性に基づいて、特殊の形式に従ふのである。例へば感覺的過程をその資料とせる歸納法は、一つの關聯の基礎の上に成立せるものであるが、この基礎としての關聯は物理、化學に於ては、量的關係の數學的知識であり、生物學に於ては合目的性であり、精神科學に於ては、生動的精神組織である。而してこの精神組織は論理的の抽象ではなくして、生命に與へられたる事實の關聯である。この關聯は個人的従つて又主觀的であり、この關聯の特色に基づいて、精神科學の歸納法の任務と形式とが規定せられるのである。而してこの精神關聯は言語に依つて表現せられ、この言語を資料とせる歸納

法の形式は、言語の理論たる文法學によつて特殊の形式を保つに至るのである（二一六）三三五頁。

かくの如くに體認作用中にも論理的過程を含み、個々の精神的状態は外部の刺激から推知しなくてはならないから、ある精神状態の體認には外界世界の認識を必要とし、この範圍の體認は説明と區別することが出来ない。他人の精神生活の理解に對して、その外的環境は缺ぐべからざるものであるから、*ディルタイ*は *Dritte Aporie* を名づけて、個々の精神状態は、それを喚起したる外部の刺激より體認せらるゝこと

(*Schon jeder einzelne seelische Zustand wird von uns nur verstanden von den äusseren Reizen aus, die ihn hervorriefen.*) (二一六)三三四頁)を擧げて居り、この點につきては *ズント* も又同一の意見を持して居る。即ち *ズント* も精神科學の認識法としての解釋法 (*Interpretation*) の三原理の一に自然的條件 (*Naturbedingungen*) を加へ (三三三)二七頁) *シュプランガー* は、體認の三つの規則の一に、「吾々は客觀的環境より體認す」 (*Wir verstehen aus der objektiven Situation heraus.*) なる一項を加へて居る。但し *シュプランガー* の客觀的環境は、*ズント* の自然的條件の外に精神的環境をも含蓄せしめたものである。(二一九)三八八頁)

然るに他方又論理的過程としての説明は、その豫件として體認の完了を要する。

(Das Erklären hat wieder die vollendung des Verstehens zu seiner Voraussetzung.) (二六〇三三四頁) の説明と體認の關聯をディルタイは把握作用と評價作用の不可分の原理 (Das Prinzip der Unabtrennbarkeit von Auffassen und Wertgeben.) と呼んで居る。(二六〇三三六頁) かくの如くに説明と體認又は解釋との間には、確乎たる境界あるにあらざして、それは程度の差である。價值感情の伴はざる體認なるものあること無きと共に、價值は比較によつてのみ、客觀的妥當となり得る (Es gibt kein Verstehen ohne Wertgefühl—aber nur durch Vergleichung wird der Wert objektiv und allgemeingültig festgestellt.)。夫故に體認作用は説明を内に含むと共に、又批判とも聯結して居る。結局すべての認識には、Erflehen 及び Erfassen 及び Verstehen の三つの共同作業を必要とする。

體認作用に於て一精神的表徴及び外界を認識するには、分離、抽象、一般化の論理作用によるのであるが、この論理作用は内的知覺の内に含まれ、之を氏は内的知覺の智性と名づけたのであつたが〔七七一七三頁〕この外に精神状態の把握の第二の特異性があり、この特異性が體認の本質を成すのである。この第二の特異性は體認に基づきて成立し、體験と結合して存立して居る。本來體験の内には、全體の情趣の過程が共に働いて居る。感覺は個々の者の多様を示すに過ぎないが、體験の中には關聯が與

へられて居り、個々の精神的過程は體驗に於ける精神生活の全體性によつて常に支持せられ、この全體の關聯は直接の經驗に屬して居る。この心理的事實が我々の自己の理會及び他人の體驗の本性を規定して居る。「我々は現象の把握に於て、説明は純粹に知的過程によるが、體驗はあらゆる情意力の協同作用に依る」(Wir erklären durch rein intellektuelle Prozesse, aber wir verstehen durch das Zusammenwirken aller Genütskräfte in der Auffassung, (七)一七三頁)と氏は云つて居るが、この語は體驗の方法論上極めて重要な意義がある。多くの學者は氏の心理學の方法に對する名句として、Die Natur erklären wir, das Soelenleben verstehen wir. を賞揚するが、體驗の核心は上の引用句に求むべきである。即ち體驗に於ては論理的過程の外に、情意力の參加を絶對的に必要とする。デイルタイが精神的實在の把握に於て、情意的の體驗を高潮し、ロック、ヒューム、カント等の偏狹なる理智的認識を猛烈に排斥したのは一八八三年以來である。(四)一八頁]而してこの情意作用の參加は、自然認識に全然缺如せる精神科學の方法上に於ける特有のものであり、殊に體驗の本質を成すのである。

自己の精神内の個々の事實の理會は、吾人に直接に生動的に與へられた全體の關聯から出發しなくてはならない如くに、他人の體驗に於ても全體の把握が先決せら

るべきものであつて、個々のものゝ解釋はその後に來るべきものである。されば全體の把握 (das Anfassen des Ganzen) は體認の第一過程にして、この第一過程の活動の底には、人間性一般が構成せられて居なくてはならない。之なくば全體の把握は全然不可能である。デイルタイはこの人間性一般を歴史的—社會的實在とした。シユプランガーは、この人間性一般を、その基本作用につき分析的に考察を進め、體認の基礎を固めんと企てゝ居る。

體認作用は表現の個々の部分又はその部分の結合の體認から出發して、内的生活の全體を把握するのであるが、しかしこの個々の部分若しくば個々の部分の理會は、既に全體の理會を豫件とするから (二十七) 三〇頁) デイルタイは體認に關する *Zweite Aporie* (二十一) Aus dem Einzelnen das Ganze, aus dem Ganzen doch wieder das Einzelne. を擧げて居る (二二) 三三四頁。かの比較研究法は個々の多くの部分を明らかにして、以て全體の意義を一層明らかにし、又之によつて、個々の部を一層深く理會せしむるものであるが、この比較法は、上の原則に則つたる一つの研究法である。體認作用はこの Aporie に支配せられて居るから、この點に一切の體認作用の最大難點が潜んで居る。この循環は原作者の精神的特徴及びその發達と彼の個々の作品との關係の内に反復

せられ、又この循環は彼の作品の全體と個々の作品との關係の内に反復せられる。之を以て理論的に云ふならば、あらゆる體認作用は上の點から必然的に一定の制限を有し、體認はある程度に止り、それ以上に進むことができない。一切の體認作用は常に唯比較的のものであつて、その完全の状態に達することは到底できない。デイルタイはこの意義を次ぎの如くに述べて居る。 *theoretisch trifft man hier auf die Grenzen aller Auslegung, sie vollzieht ihre Aufgabe immer nur bis zu einem bestimmten Grade; so bleibt alles V-ersten immer nur relativ und kann nie vollendet werden. Individuum est ineffabile.* (〔二十七〕三〇頁)

デイルタイが體認法に於けるこの循環の明白なる記述は、一九〇〇年に發表した *Die Entstehung der Hermeneutik* 及びその當時の手記に現はれて居るのであるが、しかし氏がこの問題に注意したのは、一八六〇年頃からであつて、その後の記述に早くも *Der Zirkel des Erkennens und seine Auflösung.* の語が見出される。(〔二十二〕七十七頁)

かくの如くに純粹理論的には、體認作用には必然的の限界があつて、この限界は如何なる方法によるも之を打破することが出来ない。之を以てデイルタイは、體認は無限の課題である (*Das Verstehen ist eine unendliche Aufgabe.*) (〔十六〕三三六頁) を述べて居る。されば人類に於けるこの體認の力は自然を認識し、之を支配せる力と同様に極めて

除々にしか發達し來らなかつた。而して優れた體認作用の核心は、その資料取扱の人格的の術及び熟練 (die persönliche Kunst und Virtuosität) に依る (二十七)三一九頁) のであるから體認法の發達と熟練と天稟とを必要とする。而して優れたる天稟の現出は稀であるから、體認法の發達も亦徐々たるものである。

十一

以上の記述に於て、私は不完全ながらデイルタイの體認に關する意見の大要を約説したが、之を要するに氏の體認は主として個々の精神的表徴を手段として、之に應ずる精神的なるものを求むるのである。それには先づ精神的表徴を認識し、次ぎには先づその精神的表徴の意味の決定 (Sinnbestimmung) をしなくてはならない。而してこの意味の決定はより高き全體價値を必然的に豫想するから、デイルタイは體認に於ては先づ全體を把握し、全體より部分に進めと致へて居る。部分を把握するに全體を必然の豫件となし、而してこの全體の體認は常に部分に基かざる可らざるを以て、茲にデイルタイの體認法に對する循環法の原理が設定され、體認の過程は本質的に無限となり、その結果は比較的のもので、到達吾人は他人の精神生活を知り盡す

ことは出来ない。

デイルタイの茲に云ふ全體とは、精神的關聯内に於ける活ける生動體即ち一種の主觀であるが、この主觀の本質につき、氏は分析的の細密なる考察を試みてゐないのではないかと思ふ。精神的關聯の主觀には種々のものがあり得る。例へばシユプランガーの區別して居る様に、經驗的主觀 (das empirische Subjekt) 認識論的主觀 (das erkenntnistheoretische subject) 心理學的—現實的主觀 (das psychologisch-aktuelle oder das Ich) 靈的主觀 (das geistige Subjekt) (二一九—三六八—三六九頁) 等、幾種かの主觀がある。デイルタイの體認に於ては、之等の主觀の何れを先づ把捉するのであるか。又體認作用に最も重要なるは之等の主觀中の何れであるか。之の點につきても詳細な記述を缺いで居る様であるが、時には經驗的主觀を意味し、時には心理學的—現實的主觀を意味し、時には靈的主觀を意味して居るが如くであるが、しかしこの三種の中特に靈的主觀の把捉を體認の終局の目標として居るが如くに見える。そして之等の各種の主觀の體認には、それ／＼特殊の色彩ある方法を要すべきであらうが、之等に關して氏の記する所は少い様である。

この主觀即ち全體が把捉出來たならば、之によつて全體價值又は中心價值或は中

心目的が定まる。體認はこの全體價値の示す基本方向に従つて、個々の表徴の意味を決定し、この決定せられたる意味を、全體價値の基本方向に基づいて結合するのであるが、この結合が妥當なるがためには、シュプランガーの指摘せるが如くに、價値實現の規範的法則性 (eine normative Gesetzlichkeit der Wertverwirklichung) (三十一)三八六頁がなくてはなるまい。この法則性に基づいて、體認がある程度の妥當的知識に達し得るのであるが、デイルタイはこの法則性をば、漠然と精神的關聯の規則性と呼んで居る。多くの實驗心理學者は、精神的なるものと身體的表現との間の必然的關係に基づき、他人の精神を認識せんと試みたが、この身體的表現と關聯せるものは、特殊の精神的狀態又は内容に止り、精神生活の廣大なる領域に及ぶことができない。就中精神生活の目的關聯に進み得ない。デイルタイはこの限界を明察して、所謂體認法なる一種の認識法を建設せんと企てた。しかし氏はこの方面の開拓に着手し、その重要を指摘せるに止り、この體認法の詳細なる研究は後學者に残して居る。獨逸にありては、シュプランガーが主としてこの方面に研究の歩を進めて居る。就中氏の *Zur Theorie des Verstehens und zur geisteswissenschaftlichen Psychologie* (二十九)は精讀に價する。(未完)。

参 考 書

一より二十五までの引用書は本誌大正十四年十一月、大正十五年一月號のものに依る。

- 二十六 Ditley, W. Zusätze aus den Handschriften. Gesammelte Schriften, V. Band, 1924.
- 二十七 Ditley, W. Die Entstehung der Hermeneutik. Gesammelte Schriften, V. Band 1924.
- 二十八 Ditley, W. Das Problem der Religion. Gesammelte Schriften, VI. Band, 1924.
- 二十九 Spranger, E. Zur theorie des Verstehens und zur geisteswissenschaftlichen Psychologie, Festschrift Johannes Volkelt zum 70 Geburtstag, 1918.
- 三十 Annenkungen. Ditleys gesammelte Schriften VI. B.
- 三十一 Wundt, W. Logik II, 2. Aufl.
- 三十二 Spranger, E. Lebensformen. 1924.